

世界トップレベルの女子ハンドボール競技における バックコートプレイヤーの数的優位性を作るプレイに関する研究

ー日本・デンマーク・ドイツを対象にしてー

升澤 結菜(202110008、ハンドボールコーチング論)

指導教員：藤本 元、會田 宏、山田 永子

キーワード：ポジショニング、数値化

【目的】

本研究では、女子ハンドボール競技において、日本、デンマーク、ドイツを対象に、バックコートプレイヤーのポジショニングについて数値を用いて比較を行うとともに、それぞれのチームの数的優位性を作るプレイの特徴を明らかにすることで、今後日本がヨーロッパのチームに勝利するために有用な知見を導くことを目的とした。

【方法】

2023 年女子世界選手権の計 9 試合、全 224 シーンを分析対象とした。分析項目は、相手チームの防御隊形、ポジション、生起エリア、ボール保持前のポジショニング(アタッカー(以下 AT)とディフェンダー(以下 DF)との位置関係、距離、角度)、ボール保持後のプレイ(ストップ動作、フェイク動作、歩数、ドリブル)、プレイ結果(数的な優位性の有無、最終プレイ)である。

【結果と考察】

1. ボール保持前のポジショニング

AT と DF との位置関係は、ボール空中時では、日本は正面、デンマークは利き手ずれ、非利き手ずれ、ドイツは非利き手ずれの割合が有意に高かった。キャッチ時では、日本は利き手ずれ、非利き手ずれ、デンマークとドイツは正面の割合が高かった。距離は、パス開始時とボール空中時では、日本が一番短く、キャッチ時では一番長かった。角度は、パス開始時とボール空中時では、デンマーク、ドイツ、日本の順に大きく、キャッチ時では、日本は大きく、ドイツは小さかった。つ

まり日本は、キャッチ時に DF のずれた位置に走り込むことで、またデンマークとドイツは、ボール空中時にずれた位置にポジショニングすることで優位な位置をとろうとしていると考えられる。

2. ボール保持後のプレイ

ストップ動作では、日本は片足、0-1 ストップ、デンマークとドイツは両足ストップの割合が高かった。ドリブルでは、日本とドイツはドリブルなし、デンマークはドリブルありの割合が高かった。このことから、日本はボール保持前にドリブルをせず走り込んで、片足、0-1 ストップを多用し、なるべく DF に捕まらないようにしていると考えられる。

3. 数的優位性を作るプレイ

日本はパス開始時の距離が短く、キャッチ時の AT と DF との位置関係が利き手ずれの場合に、デンマークは走り込む距離が短く、ドリブルありの場合に、ドイツはパス開始時の角度が大きく、両足ストップ、アームスイングを使い、ドリブルありの場合に数的に優位性を作りだせることが多かった。したがって日本は、AT と DF との距離が短い位置から、キャッチ時にシュートに有利となる DF の利き手側にずれて走り込むことで数的優位性を多く作り出せると考えられる。

【結論】

日本は、ドリブルせずに、片足、0-1 ストップを用いることが多く、距離が短い位置から、キャッチ時に利き手側にずれた位置に走りこんだ場合に数的な優位性を多く作り出せると考えられる。